

Title	「美術史の基礎概念」(ハインリヒ・ヴェルフリン原著, 守屋謙二譯, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	相内, 武千雄(Ainamu, Muchio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.3 (1936. 11) ,p.139(503)- 142(506)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

「美術史の基礎概念」

（ハインリヒ・ヴェルフ）
リン原著 守屋謙二譯
岩波書店發行

十九世紀の美術書の中で、ヤコブ・ブルクハルトの「Der Cicerone」が、作品そのものに對する觀照と活々とした言葉による表現によつて、人の眼を開く効果の著しかった點に於いて最大であつたとするならば、同じ彼の「Geschichte der Renaissance in Italien」は美術史の課題を純藝術的形式の側からする分解といふ點に置き、一時代の美術の總體觀を系統的に敘述したものととして、從來の美術史に對する考を新しい方向に導いたものといつてよかつた。現代に於いてこの貢獻に價するものを求めるならば、先づハインリヒ・ヴェルフの「美術史の基礎概念」がそのうちのひとつとして擧げられなければならない。たゞにこの書に於いて、彼の學的構制が完成されたばかりでなく、ヴィンケルマンからブルクハルトを貫く美術史の傳統が、そのゆきつくべき到達點に行き着いたものといつて差支へない。實にこの書は美術史に對する吾々の考に、主として様式の問題を中心としてではあるが、新しい注意を喚起させたばかりでなく、他の學問的領域、例へば文學に於いて、様式の問題に關する論争に新しい點火を與へたのである。（この問題に關係しては勿論、ウォリンガの著書も著しい影

響を與へてゐることは、決して不問に附されない。）

美術史に學問的基礎を與へようとする最初の試みはヴィンケルマンにまで溯る。彼はその著「Geschichte der Kunst des Altertums」に於いて、當代に於いて接し得る貧弱なギリシア美術の遺品を通して、能くその基調をなす特質を把握することの出來た鋭い藝術感受性を示したばかりでなく、十六世紀のヴァザリ以來、美術家の逸話の類に中心を置く美術史敘述の傳統に反して、作品そのものに重心を置き、ギリシア美術の本質を説き、その作風を明かにしようとしたのであつた。この第二のことは彼自身察悟してゐる如く當代に於いては「先人の未だ夢想だにしなかつた謂はゞ新しい發見に屬する」のであつた。彼は概念によつて歴史を説かうと試みたのである。彼自身の言葉を以てすれば美術史に「學的構制」を建てんとしたのである。

ヴィンケルマンの意圖は次の時代にブルクハルトによつて繼承される。彼は歴史的造詣の深さに於いて、特に原書に精通せる點に於いてだけでも傑出せる歴史家であつたが、彼を美術史家としての特徴づけるものは、彼の偉大な藝術的觀照力であつた。現代の所謂「課題本位の美術史」は彼に始まるのである。即ち、彼は純藝術的形式の分解を以て美術史の重大な課題と考へ、一時代の美術を生んだ内面的力、その美術の技能の總體的程度とその總體様式、その表現形式の發達を明かにしようとしたのである。彼のこの考は、當代に於いて美術家の傳記的研究や歴史哲學的研究が美術史の風潮をなしてゐたことを思ひ合せるならば、全く新しいものであつたといふことが出来る。

作品そのものに重心を置く美術に於いては、偉大な藝術的觀照力を有するといふことが美術史家の個人的條件の一つとして要求される。この要件を充たして以上の傳統に立つ美術史家を現代に求めるならば、それは正しく、ヴェルフリンである。彼の美術史に對する考は最初から定つてゐたといつてよい。彼が《Renaissance und Barock》の序言に於いて、「《荒化と肆意》のなかに藝術の内生命への洞察を興へる所の法則を出来るだけ認めようとするのが余の目的である。予は、美術史本來の終局目的はこゝにありと觀ずることを表白するものである」といつてゐるならば、《Die klassische Kunst》の序文に於いて「美術家の個性や、個人的様式や時代様式等は、常に美術史の課題であり、又人の興味を強く牽くものではあらう。しかし從來美術史學はこの一面にのみ偏して、それよりもつと重大な《藝術》といふ課題を全く等閑に附し、之を自己から派生せる——既に屢々その存在權を否定せる藝術哲學に委ねて顧みなかつた。これは常道ではない。美術史の特殊論文たるものは一片の美學を包含するといふことは當然であらう」といつてゐるのも、軌を一にせるものであつて、一定の尺度を以て作品の形式的分析をなし、そこにとり出される法則の上に美術史を建てようとするのである。彼の思想の發展は一つの目的に向けられた一本の道を歩んだものといつてよい。しかし、その發展のなかに二つの段階が區別される。最初の段階に於いては、様式は表出——それが肉體的經驗の表出と解されても、或は、生活感情の表れであると説かれてゐるにしても——であると考へられ（Prolegomena zu einer Psychologie der Architektur, 1886;

Renaissance und Barock, 1888）、後の段階に於いては、様式は一方、表出に根を下してゐると同時に、他方たゞ表出を以ては説明し盡されないもののあることを彼は見抜くに至つたのである。氣分とか情調とかの素材的な契機の他に、これとは獨立に眼或は視による純粹に形式的な契機にも、様式は根を下してゐるものである。それ故美術作品を評價するには自己の印象にのみ頼らずに、その作品を生んだ民族や時代の藝術的視を尺度としなければならぬ。かやうにして彼は様式の根源に二元説を採用したが、しかし純藝術の見地からして第二の契機即ち視の根源を重視するに至つた。ヴェルフリンをしてかやうな立場を採らしめるに至つたについては、ヒルデブラントの説に影響されるところが多であつたが、彼のこの考は先づ《Die klassische Kunst, 1898》に於いて試みられ、次いで圓熟完成されて「美術史の基礎概念」《Kunst-gehistorische Grundbegriffe, 1915》のなかに結晶されたのである。前者の書に於いてイタリア・ルネサンスの完成様式が感情と視形式の兩側面から（勿論、後者に重點が置かれてゐることはいふまでもない）明かにされてゐるとすれば、後者の書に於いては全く表現形式そのものの分析を通して、十六世紀様式（ルネサンス）と十七世紀様式（バロック）が明かにされ、その様式發展が説かれたのである。この書の冒頭に於いて説明してゐる如く、個人の氣質、國民や時代の氣分精神の表出とする様式を不問に附してゐるのではない。様式の歴史には表出とは無關係に表現そのものに關する、根柢をなす概念の層のあることを指摘し、個人や國民の性格を超越せる視發展の歴史のあることを示したのであ

つた。それ故、彼がこの書を「人名なき美術史」と呼んだのは、美術史が文化史から離れ、美術家から離れて、初めて美術それ自身の基礎の上に置かれた事を稱したものである。

ヴェルフリンが「基礎概念」に於いて展開せる所説に對しては、種々なる方面から屢々論難が加へられてゐる。しかし人は自己の器を通して經驗し體驗する。美學者は恰も現實の人體を觀察するにその骨格に於いてなし、皮膚や肉附きを忘却してしまつてゐるかの如くである。著者が一見、空虚な説明をなしてゐるところにも、吾々は停まらなければならぬ。彼が使用する概念には常に作品そのものに對する具體的表象が與へられてゐるからである。

若し又歴史家がこの書を以て「人名の美術史」に代つたものとなすならば、著者が言及してゐる如き、人は常に重要な課題であつて興味を牽くものであるとの詞を忘れたのでなければ、個人の制作もその時代の一般的な形成の可能性を知らなければ、十分に把握することは出来ないといつてゐるのを注意しなければならぬであらう。更に若し、こゝに提示された五對の基礎概念が絶對的であると信じるものがあれば、餘りに匆卒にこの書を読み下したものといはなければならぬ。時代と場所とを異にすれば、それは變形されるべきことが暗示されてゐるからである。エフ・シルレルやマーツアの言及してゐる如く、社會的實踐としての特殊形態としての美術がこゝに論ぜられてゐないことは確かであるが、それは民族や國民の表出としての様式と共に、記述的美術史の十分に取扱ふべき課題として、全體のなかに仄示されてゐるといつてよからう。ヴェルフリンは細心に斷つてゐる如く、場所や個人

の相違を超えて或る時代に共通する形成の可能性一般を論究したに止まるのである。實にヴェルフリンは美術の純造形的な形式の側面からする分析に於いて完璧であつたといはなければならぬ。然も、その範圍内に於いても、様式變遷の原因についての説明は十分でない憾がある。外的衝撃によつて螺旋運動の新たな起點に立つたといふだけでは、未だ説明を盡してゐるとはなし難い。それは恐らく、歴史に對する——若しこの語が許されるならば——靜觀的態度が然らしめたところではなかつたらうか。たゞ思ふに、十九世紀後半から起つた歴史認識のあの思想傾向、例へばリツケルトの文化價值と價值關係の如き思想傾向と歩を合せてゐるものではあるまいか。

學兄守屋謙二氏は美學を専攻して、後ち故澤木教授に師事し、ヴェルフリンの學説に對する全的解釋から嘗て日本美術史の研究方法に對するアンビシヤウスな意圖を發表したのであつた。今や、亡き師に對する敬愛とヴェルフリンに對する尊敬とから多年の努力の後、この記念的著作の邦譯を完成した。市井に見受けられる他の急遽にして成れる譯書と自ら選を異にしなければならぬ。讀者は先づ襟を正しめられるであらう。譯中、疑を入れるべき點も散見され、又、ヴェルフリンが増版に際して論難に答へながら自己を擁護してゐる他の序文も、(あの多大の勞を要する註も附されてゐるのであるからして、何らかの形式に於いても)彼の學説の輪廓を一層浮きたゞしめるために加へられたならばと望まれる。しかも、かういふ不足も著者の學的構制を決して傷けてもゐなければ、又、この記念的邦譯を完成せる譯者の功績を損ふも

のでもない。單に美術史のみならず、一般に文化的創造に關心を有するものは、この書の泉からその欲するところを汲みとるであらう。

附記 ヴェルフリンの教に従ふ者たちによつて論文が獻ぜられ、その七十歳の壽が祝はれたのは昨年のことであつた。今年にしてこの邦譯が世に出たことは悦ばしきことである。

——一九三六・七・二六—— (相内武千雄)

東洋史
西洋史

史籍解題 (平凡社發行)

早稻田の講義録から現代史學大系の『史學名著解題』に至るまで、從來この種の企がなかつたのではなく、寧ろ部分的には之が近時の流行とまでなつてゐるが、遠藤之男、鈴木俊、原種行、田中正義の四氏の編纂にかゝる本書は邦書この種のもので、最も多くの書目を網羅し、編纂に於ても幾多の特色を示し、一般讀者の歓迎を受くべき著述である。しかもこの書が短日月の間に完成したことを思へば編者の努力は大に感謝に價すべく、幼稚な本邦史學界の收穫として見るべきものがあつたと言へよう。

本書全體の構成は國史(二五〇頁)、東洋史(二八四頁)、西洋史(二四〇頁)の三部門に分たれ、卷末の索引もまた之に對應して、國史(八二頁)、東洋史(九三頁)、西洋史(八頁)に分たれてゐる。

索引は自から本書の内容を物語るもので、東洋史に最も努力が拂はれ、西洋史の分量の少ないことを、その洋書の部で補ふてゐる。本書は多數執筆者の協力になるもので各項目には署名してその責

任を明かにしてある。

國史の部に於て、書目の選定は『日本文化の各分野にわたつて一應の見通しを得ることを目標とした。従つて今まで重要視せられたものも、ある場合には除かれ又逆に等閑視せられたものも採られた』(國史凡例一頁)由で、『寫本のものも重要性の程度に應じて採りあげた』(同上)といふのはよい。又著者の生歿を西曆紀元をもつてあらはしたことは、その一々について適否を點檢して見た譯ではないが、日本史方面にこの傾向を見るに至つたことは大に喜ぶべきである。

東洋史の部に於ては、『收むる書目は、大體に於いて東洋史研究に必要な一般的なものの、即ち雜誌論文や著書等にその書名が屢々散見してゐるものを主とした。従つて特殊なもの、容易に閲讀の機會なき書は此を除き又史料として、或は東洋史研究の參考書として比較的重要ならざるも、その著名なるものは収録した。』(東洋史凡例一頁)とあつて、國史の部とは幾分異なつた意圖の下に行はれてゐる。

國史の部の終末にある對外關係西籍の項目は、東洋史部の洋書の部と對比せられるもので、その中に近く岩波文庫より出版さるべき故田中先生譯ドーン蒙古史が數度か反覆されてゐることが我等の目についた。兩部の附録として國史研究參考書目録、東洋史研究參考書一覽を加へたことは、誠に親切であつて讀者にとり便利であるが、最も必要のありさうな西洋史部には加へられてゐない。しかしそれは西洋史部全體がさういふ様な仕組になつてゐる(?)ためでもあらうか。